

歛、又は小家などを立あるき申候。然處に去年より上あら  
屋村に居申候。ケ様之ものも書上可申候哉、奉得御意候。  
以上。

寛文七年三月十六日

田井村 喜 兵 衛

林 十左衛門殿

橋本治部左衛門殿

右大工三四郎も、観音町の大工町に邸地を賜はり、作事所  
の帳面に被載たる大工なりしかど、後零落して大工町の邸  
地を退去し、石川郡荒屋村に居住し、百姓大工と成りたり  
しと也。扱その大工共の居邸、往昔は如何なりしか、後々  
まで居住せしは観音町の中程にて、數人世々居邸となし、  
犀川大工町・出大工町と同じく拜領地にて、其の邸地皆五  
十歩宛なりしといへり。

○観音古道町

元祿九年の地子町肝煎裁許附に、観音町・同古道町とあり。  
今此の町名なし。按ずるに、延寶二年観音院由來書に、観  
音山坂下より大橋までの道筋、先年は道甚狭く曲り居たる  
を、少將光高卿の時、坂下より淺野川橋爪まで、道幅三間

に直道に命ぜらるとあり。されば古道町は其の以前の古道  
筋にて、後の観音町の裏なる小路に小家を建て、観音古道  
町と稱したりしと聞ゆ。其の町今は詳かならず。

○観音山下町

元祿九年の地子町肝煎裁許附に、観音町・同古道町・同山の  
下町。と並べ載せたり。山の下町は観音御歩町の繼ぎにて、  
今は豊國町に屬せり。此の地邊は淺野川の河縁にて、観音  
山の麓也。故に観音山の下町と呼びたるもの也といへり。

○榮照山了願寺

淨土宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開基如來寺五代  
了願和尚、元和八年退院有之、隱居所として観音山の下  
地子地に一寺建立致し、了願寺与號す。寺地四百八十二歩  
餘、外に百六十七歩観音院山地之内墓地請地末に申請、都  
合六百八十四歩餘也。とあり。観音町壽經寺由來書に、了  
願寺開山了願和尚、元和九年観音町地子地に壽經寺を建立  
す。とありて、了願寺を創立せし翌年、また壽經寺を建立  
せられしと聞ゆ。三箇屋版六用集に、了願寺・壽經寺二ヶ寺  
共に卯辰観音下と記載して、了願寺・壽經寺・玄門寺誓願

寺の四ヶ寺共に如來寺の末なり。

○観音坂下

此の地は従前観音院の坂下なりしゆゑ、観音坂下と呼び  
て、坂の麓に小家共あるをいへり。

○観音坂下妓樓傳話

金澤俳優傳記に云ふ。観音坂下に座敷女多く居申内、藤田  
屋と申家有之處、座敷の内に虎の間・竹の間、其外松竹梅  
を名付け、或は上段の座敷もあり。疊のへりは天鷲絨にて  
こしらへ、その外榮耀高直の品多くかざり、其物敷寄たと  
へんかたなし。か程に奢り、遊所同やうに相成るに、遊客  
入來すといへども高聲もならず、酒興に乗すといへどもつ  
んばさわぎと申して物言はず。たゞをかき風して酒吞む  
ばかり也。尤下女などに用事ある節は、多葉粉盆・灰吹など  
をたゝき、またはせきばらひを合圖にいたしたり。尤蠟燭  
火は用ひず。行燈に前かけかぶせてくらがりの遊びなりし  
ゆゑ、改方の與力矢木と申す人、多くの下役人を召連れ、  
右の邊りを毎夜く相廻り、往來に床机に腰かけ、風俗惡  
しき者共残らず召捕られ、座敷女などわけて嚴敷咎めら

れ、下々の難儀を厭はず、非道のみ多く、實に困窮させら  
れしが、程なく悪心生じて、知行召放されたり。此の時分  
いろくかはりし事あり。第一大地震にて、黒津船の神主  
は龍宮へひきこみしとの事也云々。とあり。按ずるに、北  
國の大地震は、寛政十一年五月廿六日の晩景にて、此の時  
河北郡黒津船の神主齋藤近江の家土中へ陥り、家族残らず  
果てたり。されば右観音坂下の妓樓の傳話も、寛政十一年  
の頃なりし事知られけり。此の後も密に座敷女を抱え置  
くこと絶えざりしとぞ。

○観音坂

此の坂は卯辰観音院の門前なる坂路也。延寶二年の観音院  
由來書に、観音山坂下より大橋迄之道筋、先年は細曲に有  
之。など、載せたり。

○観音坂兩刹

眞言宗にて愛染院・醫王院と號す。貞享二年の観音院由來  
書に、當寺地内愛染院は、慶安二年観音院祐譽取立、醫王  
院は寛永九年観音院祐雄建立。とありて、元は観音院の支  
院なりといへり。按ずるに、兩刹の中にも愛染院は、石浦